

はじめ

わたしの名前はクウものを空中に浮かせられることができる。ある日、すなばで遊んでいると、砂場の中に、宝島の地図と鍵が埋まっていた。こうしてわたしは宝島の冒険に出発した。

事けん

ついたのはむし暑くてジリジリしている火山。ゴオー、冬なのにまるで夏のような火山。リュックの中は不慣れた物ばかり。クウは急いで上着を脱いで水を飲みました。「あつっ」火山を触ると火傷しそうで、火山に倒れることもできないのだ。リュックの中にはもう水はありません。「海水を飲んで休もう」その時です！ドォーン、火山が噴火して溶岩が転がってきました。「うわーどうしよう焼け死んじゃう！」

中

かいけつ

「大丈夫だわたしはものを空中に浮かせることができる」クウは火山を空中に浮かせて海に投げつけました。次の相手は溶岩です。クウは海水を空中に浮かせ、溶岩に投げつけました。すると溶岩は「シュー」と消えていきました。「やったー」クウは急いで海水をいっぱい飲みました。十分すずしくなったころ、またおたから探しにもどって、お宝を探しに行きました。

おわり

火山の近くの橋をわたればそこにすぐお宝がありました。中に入っていたのはたたくさんのお金そしてめっちゃたかいケータイがありました。「うわあ」それを見て思わず「やったー！」と言いました。それからわが家は幸せにくらしましたとさ

はじめ

私はさくみ。億万長者が夢で工作でかせこうとしている。親は画家でとてもかせいでいる。私はいつもガムテープや画用紙コピー用紙いろいろ持ち歩いている。私はいつもせつちで早く億万長者になりたいといつも急いでいる。親は私と違いいつもゆつくりで絵を描くのも落ち着いている。次の日に親がここはいなかで木ばっかだからひっこそうと言った。そしてたなの荷物をせいりしようとななのなかを見ると宝の地図がおいてあった。「なにこれ。お母さんおいたのかな？」とふしぎになった。「お母さんこれ何？」「知らないよ。お母さんもふしぎそうに首をかしげていた。「ねえいっしょに宝箱を探しに行こうよ！」「うんまあいいよ」「やったー！」

事けん

私たちは地図を見ながら親とすんでいくとなんだか暑くなった。火の鳥みたいなおそろしいかいぶつがいた。それはまわりにいるだけでもあつくてまきに火の鳥だった。そいつはとても大きくて大きくて3メートルいじょうあつてとぶだけでバサンバサンと大きな音を立てた。とっても怖くなった。すると火の鳥が言った。「あの宝がほしけりゃ私とたたかって勝ったらかぎをあげよう」と言った。お母さんが言った「な、なんなのこの鳥は。どうたいじすればいいの」そして私はハツとした。(そうだ私はいつもテープを持ち歩いてるんだ。これで・・・)

中

かいけつ

ガムテープで口と鼻をしぼってちっそく死させる、これを使っていたいじしよう。鳥は少しあせをかいていた。「お母さんまかせて私がする」「わ、わかった」「どうした、ピピったのか？」(なわけあるか)わたしは工作でかいだんを作った鳥がいるに登った。「そして火をふかないようになまず口をしぼると」「な、何をやる！」(よし)のガムテープはがんじょうだからそうかんたんにやぶれない。「さくみ、何をやるの！」「たいじしてるの」「そんなのでいけるの？」「大丈夫大丈夫」(次は鼻をしぼる)またガムテープでしぼった。そして息ができなくなった鳥は消えていってそこからかぎが落ちてきた。

おわり

そのかぎで私は宝箱を開けた。するときんかや宝石がたくさんあった。私とお母さんは目をかがやかせた。「す、すごい！」「きれい」すくこうかでぜいたくで本当にうれしかった！「これで億万長者になれる！」「色々あったけどさいごになんとか勝ってよかったね」こうして私はゆめの金持ちになった。